# 黒人の文学

大内義一著

松柏

# 黒人の文学

大内義一著

松柏社
東京

## 著者略歴

1912年　淡路島に生まれる。
兵庫県立洲本中学校を経て、
昭和10年早稲田大学英文科を
卒業。現在早稲田大学教授。

著書　「ロレンスの哲学」(健文社)
　　「愛蘭の文学」(稲門堂)
訳書　「二十世紀の文学」(アイザック)
　　「自由について」(リード)
　　「愛と性の位置」(ラッセル)
　　「怒りの天使」(ジラヒ)(以上河出書房)


黒人の文学

昭和42年8月31日　初版印刷
昭和42年9月1日　初版発行

1967©　¥350

著者との協約により検印を省略します

著者　大内義一
発行者　森　政一
印刷所　三報社印刷株式会社

発行所　株式会社　松柏社

東京都千代田区飯田橋2丁目8番7号
振替　東京 79095番
電話 (263)3451～3

＊乱丁・落丁は郵送料当社持にてお取換えいたします。

# はしがき

本書はこれまで私が黒人文学について、「英文学」「教養諸学研究」「N・H・Kテキスト」などに書いたものに、多少筆を加えて一巻としたものであります。したがって、重複した点や、首尾を欠く点もありますが、黒人文学に関心をお持ちの方々の参考になるよう、できるだけ解説を加えました。

元来、私はアイルランド文学を専攻している者で、黒人文学について、全く無知でしたが、終戦直後中央大学教授の野崎　孝氏から、リチャード・ライトの「アンクル・トムの子供たち」を読むようにすすめられ、初めて黒人の書いたものを読み、異常な興味を感ずるようになりました。ついで、早稲田大学大学院学生だった西江君からクロード・マッケイの詩集を頂くに至り、専ら黒人の文学ばかり読んだ時期がありました。

この間、十四、五年という短い期間に黒人の文学も、社会抗議を行なった姿勢から、現代のもつもろもろの矛盾を集約的に背負うているという立場から、普遍的な人間の問題を鋭く追求する姿勢に代り、極限状況から現代人の抱く問題を追求する様相を呈するに至っています。大きな転換があったと思いますし、こうなっては、黒人の文学という範疇から、徐々に文学というより大きな範疇の中に吸収されようとしていると思います。そのような意味から、ここには、社会抗議の文学のみ収めることとなってしまいました。

「黒人に法的な権利を与えるだけでは黒人問題は解決しない。黒人の不幸は単に皮膚の色の違いからきたものではない。それだけならば、黒人も米国の他の少数民族のように自立できたはずだ。黒人の不幸には虐待と不正の長い歴史、そしていまもなお存続している偏見が根ざしている。黒人にとってそれは圧迫の悪夢であり、白人にとっては罪の記憶である。」

これは一九六四年六月四日、ワシントン市内にある黒人大学の名門校ハワード大学でジョンソン大統領の行なった演説です。黒人問題の根源をよくついていますが、「黒人にとっては圧迫の悪夢」を、「白人にとっては罪の記憶」を、述べた文学は、これからも、アメリカ社会のもてる構造的矛盾が、なくならない限り、どしどし出てくるでしょう。と、ともに、ますます黒人の文学が研究され、読まれるものと思います。

なお、黒人文学を研究なさっている多くの先人から、幾多の教示と示唆を得ましたが、これらの先人の研究がなければ私のこの書物もなかったわけです。これも感謝しなければならぬことです。

一九六六年秋

著　者



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

はしがき……1
1 クロード・マッケイの詩……1
2 ブーカー・ワシントンとデュボア……39
3 リチャード・ライトについて……67
4 リチャード・ライトにおける恐怖について……103
5 リチャード・ライトの「黒人の力」について……125
6 黒人霊歌について……151
7 ポール・ローレンス・ダンバーについて……173
索引……巻末1

装釘　小松久子

# 1　クロード・マッケイの詩

## (一)

アメリカ文学史上ニグロ・ルネッサンスという時期が、一九二〇年にあった。これは白人の側からと、黒人の側からと、二つの面から考えることが出来る。都会生活に疲れた二十世紀人の原始アフリカによせるノスタルジーが、大陸におけるD・H・ロレンスの「原始に帰れ」の提唱と呼応して、アメリカにも原始復帰運動が起こされたこと、これが白人の側から働きかけたニグロ・ルネッサンスであったし、黒人の側から働きかけた運動としては、ジェームズ・ボールドウィン（James Baldwin）が、「誰も私の名を知らない」（*Nobody Knows My Name*）のなかで、つぎのように要約して言っている。

This Negro Renaissance is an elegant term which means that white people had then

discovered that Negroes could act and write as well as sing and dance and this Renaissance was not destined to last very long. Very shortly there was to be a depression and the artistic Negro, or the noble savage, was to give away to the militant or the new Negro.

(James Baldwin, *Nobody Knows My Name*, p. 118)

「このニグロ・ルネッサンスという言葉は上品な言葉で、ニグロたちは、歌を歌ったり、踊りを踊ったりすることができるだけではなく、芝居もできるし、物も書けるということを、白人たちがその時になって、知ったという意味なのです。しかし、このルネッサンスは、あまり長続きをする運命にはありませんでした。間もなくそれは沈滞し、芸術的なニグロ、あるいは高潔な野蛮人たちは、戦闘的な、あるいは、新しいタイプのニグロに席を譲ることになりました。」（黒川欣映氏訳）

ニグロもまた歌うことができ、物を書くことができることを実証した詩人に、すなわちボールドウィンのいう「芸術的なニグロ、高潔な野蛮人」(the artistic Negro,or the noble savage) のなかにラングストン・ヒューズ (Langston Hughes) と、クロード・マッケイ (Claude McKay) がいる。いわば、ニグロ・ルネッサンスは以上二人の画期的な詩人をアメリカ社会に送り出したのであるが、それは新しい人種意識と自己認識の誕生をも示すものであって、文字通りの人間復興であった。しか

し、新しい人間性のめざめを招くという結果をもたらしはしたけれども、新しい技術の実験や、新しい哲学の招来や、あるいは積極的に不平等を訴えようとする抵抗の姿や、あるいは敵からする攻撃にたいし、身を守らんとする防御の哲学を教示することなどは、これまたボールドウィンのいう「戦闘的な、あるいは新しいタイプのニグロ」(the militant or the new Negro) の到来を待たなければならなかった。

詩人がその本来の仕事の上で、文明批評家であるとするならば、あるいは近代詩人の要件として、文明批評家を詩人の必然の姿とするならば、ラングストン・ヒューズも、クロード・マッケイも失格者というべき者であろう。なるほど、「ハーレムの影」(1921) において、マッケイは、反俗の詩、抵抗の詩を書いたけれども、志向するところは、文明の批判になく、ひたすらに人種意識と自己認識に志向して、憤激は心のなかに沈澱した。いうなれば彼は「戦闘的なあるいは新しいタイプのニグロ」ではなかったのである。彼は一九二八年「ホーム・ツウ・ハーレム」という小説を書き、それはベスト・セラーとなって、一般に知れわたり、そしてまた、マックス・イーストマンの言葉を借りるならば、「文学史上最初の偉大な黒人抒情詩人として後世に残るであろう」(He will live in history as the first great lyric genius that his race produced.——*Amoroso*, Introduction by Max Eastman) ということになろうが、彼こそ「黒人もまた歌を歌うことができること」を、「黒人もまた物を書くことができること」を訴えたルネッサンスの生みなした詩人ということができるであろう。

## (二)

クロード・マッケイは一八八九年ジャマイカの貧農の子として生まれた。ジャマイカに生まれたがために、正しい意味からいって、アメリカの作家とはいいかねるが、文学活動のほとんどすべてをアメリカで行なったがゆえに、ふつうアメリカの作家の系列に入れている。彼は二十二才になるまで学校に行かなかったが、小学校の先生であった兄から教えをうけ、強い影響を与えられたといわれている。それはともかくとして、兄は自由な思想の持主だったらしく、蔵書も多く、クロードは蔵書中の詩集をむさぼり読み、独習で作詩法を学んで詩集を出版した。一九一一年のことで、彼はまだ二十才という若者であった。詩集は「ジャマイカの歌」(*Song of Jamaica*) と題され、ジャマイカの方言を駆使し、地方色豊かであり、詩情また濃い抒情詩集である。「ジャマイカの歌」は豊かな才幹と、珍しい風物誌をもって、人々の注視を呼び、彼はロバーツ・バーンズ (Robert Burns) になぞらえられ「ジャマイカのボビー・バーンズ」(Jamaica's Bobbie Burns) と呼ばれるに至り、一九一二年インステチュート・オヴ・アーツ・アンド・サイエンス (Institute of Arts and Sciences) は彼にメダルを贈って賞讃した。

一九一二年クロードはアメリカに渡り、タスキーギ工業師範学校（Tuskegee Institute）に学び、ついでカンサス州立大学（Kansas State University）の農科に籍を置いたが、二年にして退学してニュー・ヨークに住んだ。その頃ニュー・ヨークでは、ハーレムがちょうど白人の立派な町から、黒人の住むうす汚いスラム街に変ぼうして行く途上にあり、失業者の群や、酔っぱらいの群が白昼から横行し、けんか、たかり、ゆすりなど、犯罪の巣となり、白人によるリンチがくり返し行なわれるという有様であった。多感な詩人の眼に映じたものといえば、アメリカという現代文明の先端を行く国にあって、文明がもたらした疎外という奈落の底に、ひたすらに自己に与えられた生を、生き続けようとする底辺に生きる人々の群であった。そこで、当然のことながら、マッケイにも転機が訪れてきたのである。

世と人と自然を愛し、いっさいに反逆せず、順応を好んできた彼の性格が、一転して激しい詩情となったのである。先駆者バーンズの模倣となって表現されていた風物誌は、一転して屈辱と破廉恥の横行のなかで、やる方ない悲憤を歌う反俗の歌となった。この悲憤と反俗とは、ハレームという頽廃のなかにあって、マッケイ自らも失業と飢餓に苦しみ、底辺に生きる群の一員となって初めて、つちかわれたことはもちろんである。

ジャマイカのボビー・バーンズが、アメリカのマッケイになるためには、美がすすんで自ら手をさし出し、詩人に脱俗の手引をする必要はなかった。頽廃のなかに身を沈め、疎外感を身にしみて味わ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うことをもって充分だったのである。かくてマッケイは自然詩人と抒情詩人に別れをつげ、良識を護る正義派の立場に立って、ハーレムにうごめく人間を歌う詩人となった。

## The Harlem Dancer

Applauding youths laughed with young prostitutes
And watched her perfect, half-clothed body sway;
Her voice was like the sound of blended flutes
Blown by black players upon a picnic day.
She sang and danced on gracefully and calm,
The light gauze hanging loose about her form;
To me she seemed a proudly-swaying palm
Crown lovelier for passing through a storm.
Upon her swarthy neck black shiny curls
Luxuriant fell; and tossing coins in praise,
The wine-flushed, bold-eyed boys, and even the girls,
Devoured her shape with eager, passionate gaze;

But looking at her falsely-smiling face,
I know her self was not in that strange place.

## ハーレムの踊り子

若者は拍手し、若い娼婦たちと笑いながら、
踊り子が美しい半ば裸のからだをくねらせて、踊り狂うのを眺めていた。
踊り子の声はピクニックの日に、
黒んぼのフルート吹きの吹きならす、フルートの混じった音色のようだった。
踊り子は歌いながら、優雅に、落ち着いて踊り続け、
からだのまわりには、うすい紗の衣が、ゆったりとまつわっていた。
私には、嵐を通りぬけたので、
いっそう美しい冠をつけた棕梠の木が、
ほこらしげにゆれているようにみえた。
彼女の浅黒い首には、黒い輝く巻毛が溢れるばかりにたれていた。
酒やけした男や、だいたんな眼つきの若者や若い女の子さえ、

彼女をたたえて、お金を投げ与えながら、
熱烈な情欲をこめた眼つきで、
彼女のからだを貪り眺めていた。
けれども、私は彼女の偽りの笑い顔を眺めて、
彼女の本心はここ、この知った人のいないところには、ないことに気がついていた。

ハーレムに沈潜し、ハーレムにおいて生活の糧を与えられていたマッケイの詩的関心は、この世界にうごめくさまざまの個性であり、出来事であった。けれども、頽廃のハーレムを、ハーレムにうごめく人々の姿を、自嘲的に自虐的に追い、かつまた自嘲的に、自虐的にとらえたとはいえ、マッケイの詩的執念は、世相をあばき、世をなげく社会詩人のそれとは異質の形をとった。なぜなら、かつて静寂のなかに沈潜し、原始のなかに沈澱していたジャマイカの自然詩人の抒情が、なおもマッケイの心情のなかに根を張っていたからである。それゆえに、反抗は外に向かわず、内にこもって自分にはねかえり、自嘲となり自虐となり、結局において、彼は素朴な純情詩人であり、社会的な哀訴に欠けていた。したがって、たまたま通りかかった娘にも、自らの黒い肌を宿命と見、ハーレムの人影にも、ヒステリックな絶叫は送らなかった。

## The Barrier

I must not gaze at them although
Your eyes are dawning day;
I must not watch you as you go
Your sun-illumined way.

I hear but I must never heed
The fascinating note,
Which, fluting like a river reed,
Comes from your trembling throat.

I must not see upon your face
Love's softly glowing spark;
For there's the barrier of race,
You're fair and I am dark.

## へだて

私はあなたの目をみてはいけないのだ。
あなたの目はれいめいの太陽であるけれども、
私はあなたの歩む姿をみてはいけないのだ、
あなたは太陽の輝きのように、さっそうと歩むけれども。

私はあなたの、みするような声を耳にするけれども、
私は耳を傾けてはいけないのだ。
あなたの声は、川床のあしのように、美しくきしみながら、
あなたのおののく、のどからほとばしるのだけれども。

私はあなたの顔に浮かんだ
愛のやわらかく燃えるほのおをみてはいけないのだ。
なぜといって、人種のへだてがあるからだ。
あなたは美しい白人だし、私はみにくい黒人だから。

## Harlem Shadows

I hear the halting footsteps of a lass
    In Negro Harlem when the night lets fall
Its vail. I see the shapes of girls who pass
    To bend and barter at desire's call.
Ah, little dark girls who in slippered feet
    Go prowling through the night from street to street.

Through the long night until the silver break
    Of day little gray feet know no rest;
Through the long night until the last snow-flake
    Had dropped from heaven upon the earth' white breast
The dusky, half-clad girls of tired feet
    Are truding, thinly shod, from street to street.

Ah, stern harsh world, that in the wretched way





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com